

昭和三十五年十月二十五日 「講演感想記」

「開拓者精神」

加藤弁三郎先生は、協和醗酵株式会社々長というお忙しいお仕事の中から無理に来て頂いて、一席の講話を拝聴した。

二宮尊徳翁の行動そのままの言葉をバックボーンとせられた先生の一生は、開拓者精神の実行そのものであった。

見渡すかぎりの荒野に立って、鋤も鍬も鎌もない、一人の協力者もない中から根気よく開墾に努力して、やがてここから美しい田を作り、稔りの秋を迎える。これは容易な事ではない。しかしこれを身を以て示された尊徳翁に感銘せられた先生が、昭和十二年十一月一日協和会の名のもとに、大ビルの中の小さな一室から現在の仕事を始められたのである。

日比谷の一角にあったこのビルの一室には、研究用の道具は勿論、研究室も一人の協力者もない中に、先生は唯一人であったという。それは丁度鋤も鍬も鎌も協力者もなく、一人荒野に立たれた尊徳翁の姿そのままであった。それがたゆまぬ努力で一つ一つ障害がとり去られ、研究室も協力者の問題も自からの手で解決せら

れ、次から次にと研究が実を結び、漸く世間も認めるまでに育てられたのである。

その完成された発明は、戦後の日本に沢山の外貨を獲得している。先生の生涯はこうした実行の連続であつて、昭和二十四年石炭液化の工場が荒廃したまま放置されていた。この会社は政府が九十八%の株を持っていて戦時中は石炭液化の国策に従っていたのであるが、戦後仕事もせず従業員と共に荒れるがままであった。見れば全く手のつけようのない有様で、果してこれがどうなるかと思われたのであつたが、この復興を依頼されるや、これはやらなくてはならないと決心されて不安におののく従業員を集め、これに開拓者精神を説かれ、今にこの廃墟の中から諸君の樂園を作るのだと話された時、彼等は涙を流して感激したというのである。果してそれから五年、そこ山口県宇部市には、殆どの福利施設を完備した立派な工場が実現したのである。現にその工場の研究費は、工場から生れる多くの特許権で稼ぐ外貨によつて賄われているとのことである。尊徳翁の体験を

協和醗酵株式会社々長 加藤弁三郎先生

そのまま実行に移されたこの話に深き感激を覚えた。

このほか先生はいつも新入社員に、入社記念として鏡を渡される。この鏡は、昔お釈迦様が誘惑に來た悪魔に対して用いられた故事に依るとはいえ、自己反省の必要性を教えられたものである。とかく私達のやることは自己弁解であつたり、自賛であつたりする、自己の間違った姿に溺れることなく、正しい自己を知ることが如何にその生活を豊かな安定したものにすることを、鏡によつて悟ることを望まれたのである。ここに真の意味での自由が生れるのである。人間は自惚れのかたまりで、たまに謙虚に見えても、卑下慢に陥っている。先生が信仰せられていた仏教は、死後の問題を解決するものではなく、現在生活の支柱である。有名な毒矢の例の様に、その矢が何所から飛んで來たとか、毒矢の先に何が附いているとかを論議することではなく、先ずその毒矢を抜く事にある。それが仏教であつて、吾等は如何に生くべきか、最上の幸福とは何かを教えているのである。

仏教による生活態度の転換は、真の自由を得ることになって、開拓者精神がどうの、協力者がないの、鋤がないの、鎌がないのと力む必要はなくなるのである。念仏無礙の喜びと感謝の中に働ける真の自由が楽めるのであると力説されたのであった。かくて先生の長い今日までの生涯は、一隅を守り抜いて世のために貢献せられた生きた実例である。私達は深い感銘に拍手の嵐を送りながら静かに反省した。

(塾理事 望月勲造)

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。